

単元名 千葉県発展につくした人々

背景

- 1 学年
 ④ 田
 1 1
 2 2
 3 3
 ④
 5
 6

本単元では、地域の発展に尽くした先人の具体的事例として、染谷源右衛門らによる江戸時代中期に水害防止、新田開発を目的として行われた印旛沼の開発を取り上げる。

江戸時代、利根川が銚子へ流れるようになってから印旛沼付近が毎年のように洪水に見舞われるようになり、享保、安永、天明、天保年間には大飢饉が起こった。その度に治水と新田開発の目的で印旛沼の開発は計画、実施されたがいずれも成功はしなかった。ここではその中で享保年間1724年に八千代の平戸村の染谷源右衛門によって行われた工事を主として取り上げる。染谷源右衛門は江戸幕府の許しを得て、幕府から6000両の資金を借りて工事に着手したが、難工事のため途中で資金が不足し断念せざるを得なかった。その後天明年間には老中田沼意次が、さらに天保年間には老中水野忠邦が幕府の事業として工事に取り組んだが、いずれも完成には至らなかった。結局、工事の完成をみるのは昭和21年からの国営事業で、昭和44年ようやく終わったのである。これだけ長期間に渡って工事に取り組むということは、開発の必要性がそれだけ高く、また工事が難しいものであったということを示す。染谷源右衛門の工事は印旛沼の水を掘り割りによって花見川へ流すための工事が主であったが、その発想は昭和の工事にも引き継がれている。また、工事自体も難しさを極め、特に地盤が泥炭土のため、掘ってもすぐ崩れてしまったり、大雨が降るとそれまでの工事が無駄になってしまったりすることが繰り返された。そうこうしているうちに幕府からの資金は底をつき、しばらくは染谷源右衛門自身の資金で続けたが、結局は断念せざるを得ない状況に追い込まれた。

ここではそのような工事に取り組んだ染谷源右衛門の思いに触れ、先人たちが200年もの歳月をかけて工事を行ったおかげで今の印旛沼の姿になり、それによって現在印旛沼の水が人々の生活に役立って使えるようになったことなどを学ばせ、児童の郷土愛を深めていきたい。

2 教科・領域

- 国語 生活
 ④ 社会 家庭
 算数 図工
 数学 道徳
 理科 総合

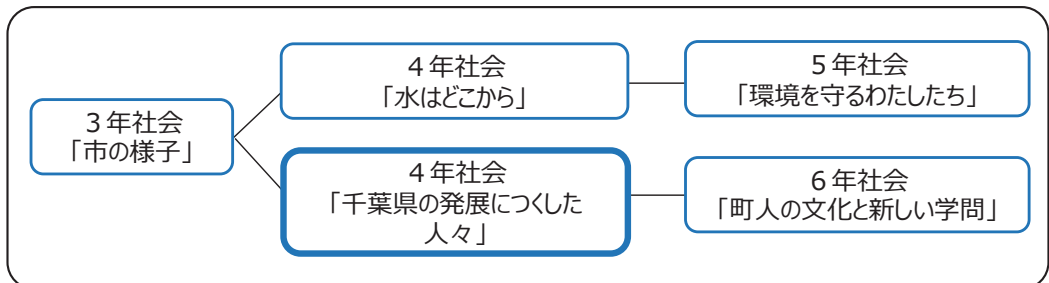
ねらい

- 地域の発展に尽くした先人は、様々な苦心や努力により当時の生活の向上に貢献したことを理解すること。
- 当時の世の中の課題や人々の願いなどに着目して、地域の発展に尽くした先人の具体的事例を捉え、先人の働きを考え、表現すること。

3 見方や考え方

- 多様性
 関連性
 空間的広がり
 ④ 時間的変化

系統



資料・準備・関連機関等

4 資質・能力

- ④ 知識・技能
 思考力
 判断力
 表現力
 ④ 主態度

- 資料
- ・「すすむ千葉県」千葉県教育研究会社会科教育部会、2018
 - ・「いんばぬま情報広場」印旛沼流域水循環健全化会議、<http://inba-numa.com/>
 - ・「印旛沼流域情報マップ 治水・利水編」虫明功臣・白鳥孝治・本橋敬之助、印旛土木事務所、2013
 - ・「シンキングツール～考えることを教えたい～」黒上晴夫・小島亜華里・泰山裕、NPO法人学習創造フォーラム、2012
- 関連機関
- ・企業局管理部業務振興課
 - ・公益財団法人印旛沼環境基金

指導計画

5 指導時間

- ・準備 1時間
 ・授業時間 1時間

時配	学習内容
1・2	年間指導計画に準じて展開。
3(本時)	印旛沼の開発や郷土の先人である染谷源右衛門について調べる課題を理解する。
4～12	年間指導計画に準じて展開。

本時でねらう見方や考え方

私たちの身近にある印旛沼は、郷土の先人である染谷源右衛門らによって開発され、現在の姿になったという時間的変化があったことを理解する。

本時の指導 3 / 1 2

- (1) 目標 ・印旛沼の開発や郷土の先人である染谷源右衛門について調べる課題を理解する。(知識・技能)
 ・昔と今の印旛沼の写真を見比べて、これから調べることを考えようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- (2) 展開

学習過程	時配	学習活動と主な発問(◎)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	3	1 これまでの学習内容について確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 千葉県発展に尽くした人々として「伊能忠敬」「石川倉次」「間宮七郎平」「染谷源右衛門」がいたことを確認する。 	既習の掲示物
	2	2 本時の学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">印旛沼の昔と今の写真を比べてみよう。</div>		
調べる	4	3 昔と今の印旛沼の図を見比べて、変わったところを探す。 ◎昔と今の印旛沼で変わったところを探そう。	<ul style="list-style-type: none"> 変わったところを全体で考えながら変化の様子を捉える。 	昔と今の印旛沼の図
	8	4 印旛沼の変わった部分の面積や作った水路の長さなどを知り、大規模な工事がされたことを知る。	<ul style="list-style-type: none"> 印旛沼の治水工事によって開発されたおよその面積や、引かれた水路の長さを知り、印旛沼の工事が大規模なものであったことを理解できるようにさせる。 	工事の規模を示す図
深める	5	5 なぜ大規模な工事をしたのかを考える。 ◎これだけ大きな工事をしたのはなぜだろう。	<ul style="list-style-type: none"> 大規模な工事だったにも関わらず行った理由を考えさせ、予想を発表させる。 	
	7	6 水害を受けた場所を示す図を見せ、工事の必要性を確認する。 7 単元の学習課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 広範囲に渡って水害が起き、農業や住宅にも大きな被害をもたらしたことを確認する。 工事の必要性があったことを確認する。 	水害を受けた場所を示す図
まとめあげる	3	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">私たちに身近な印旛沼は、どのようにして今の姿になったのだろうか。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ☆印旛沼の開発や郷土の先人である染谷源右衛門について調べる課題を理解している。(知・技) 	
	1 2	8 「Xチャート」を使い、調べる課題をつかむ。 ◎どのようなことを調べると学習課題が解決するだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> はじめは調べることをノートに箇条書きする。 課題を発表させ、教師が短冊に書いていく。 短冊を、Xチャートで整理して、各区分の名前を付け、調べる観点とする。 「時間」、「人」、「方法」、「思い」という区分にする。 ☆昔と今の印旛沼の写真を見比べて、これから調べることを考えている。(主態度) 	ワークシート(Xチャートの図)短冊
	1	9 次の予告をする。	<ul style="list-style-type: none"> 次の時間からは課題に沿って各自で調べるところを知らせる。 	

(3) 板書計画・ワークシート

印旛沼の昔と今の写真を比べてみよう。

昔の印旛沼の形

工事の規模を示す掲示物

今の印旛沼の形

印旛沼は大きな工事が行われた

私たちに身近な印旛沼は、どのようにして今の姿になったのだろうか。

大きな被害
↓
 工事が必要

印旛沼の水害を受けた場所を示す図

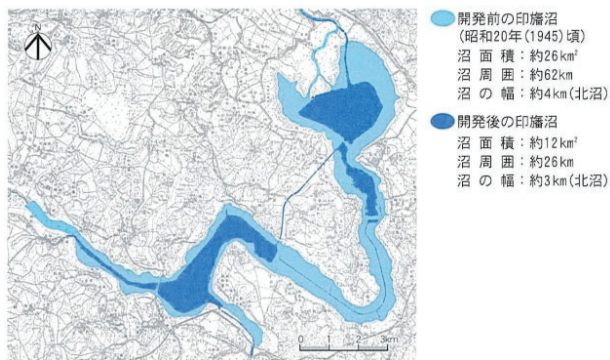
資料等

(1) 資料及び使い方

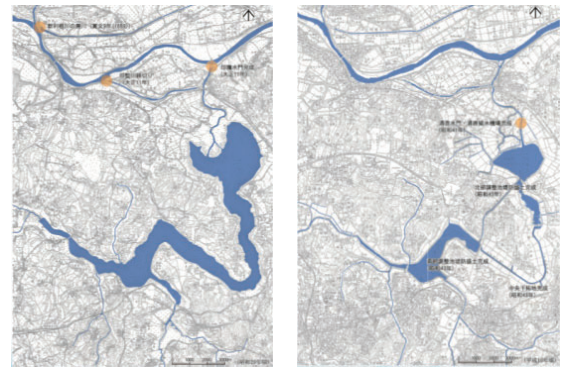
○既習の掲示物

⇒単元の導入段階のため、伊能忠敬・石川倉治・間宮七郎平・染谷源右衛門の写真と名前のみをまとめる。

○昔と今の印旛沼の図（重ねた図、昔、今）



(印旛沼流域情報マップ 治水・利水編)



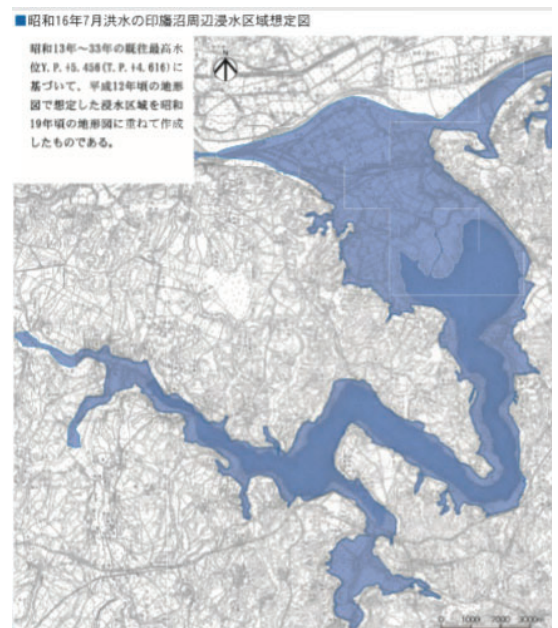
(印旛沼流域情報マップ 治水・利水編)

○工事の規模を示す図



(印旛沼流域情報マップ 治水・利水編)

○水害を受けた場所を示す図



(印旛沼流域情報マップ 治水・利水編)

○思考ツール「Xチャート」の使い方

⇒①調べることをノートに箇条書きする。

②考えたことを発表させ、教師が短冊に書いていく。

③短冊を分類しながらチャートの各区分に整理して貼る。

④各区分の特徴を書き、調べる観点とする。

(2) 授業のポイント

「5 なぜ大規模な工事をしたのかを考える。」

⇒前段階で規模の大きさを実感させる。例えば、沼面積が26km²から12km²となっていることから、沼の平均の深さを1mとすると、それを埋めるのに14,000,000m²×1m = 14,000,000m³の土の移動が必要ということになる。その土の量は、学校の校庭の広さを10,000m²とすると、そこに土を入れると、1,400mの高さの山ができる計算になる。用いていた道具も現代と違うことを知らせることで、工事がいかに大変だったかを考えさせる。その際、実際に道具を用意し触れさせることで、より工事の大変さを感じられるようにするなどの工夫も効果的であると考えられる。

(3) 留意点

歴史についての学習は、4年生ではまだ本格的に扱っていないため、時代や背景について丁寧に説明する必要がある。具体的に、江戸時代は、土を運ぶときには人が荷車を押し、土を掘るには人が鍬を使うことから、全てが人力によるものだということを押さえる。(詳しい様子については、『すすむ千葉県』P.91を参照。)

また、昭和44年に工事が完成し、それで印旛沼が洪水に悩まされなくなったということではない。工事で作った印旛水門や大和田機場では現在も水資源機構(千葉用水総合管理所)の人々が、沼に水をためたり、台風の時には水をくみ上げて東京湾に流したり、水位管理をしているおかげで現在印旛沼では水害が起こらなくなっているということをおさえる。

そして、単元のまとめとして、染谷源右衛門を含む多くの人の努力によって私たちは安心して生活できるようになっているのだと気付けるようにしたい。

(4) 発展または別案

展開の順を入れ替えて、今の印旛沼の写真の後に、印旛沼が水害を受けた写真を見せて、学習問題につなげる展開も考えられる。その後「どんなことを」で工事の規模を、「どんな思いで」でなぜ工事を行ったかを調べてもよい。